

## 17. <翻訳は難しい! ?>

壺萬円札の福沢諭吉は、economy の訳語として経世済民から経済という言葉を作った翻訳の天才です。漢文の造詣が深い明治文化人の造語能力に思いを馳せつつ、下水道用語の翻訳について考えてみましょう。

「標準活性汚泥法」という言葉は、下水道事業に携わる人々にとって、知っていて当然、知らなければモグリというぐらい、あたりまえの用語ですが、さて、クイズです。これを英語で何というのでしょうか。「標準」だから standard と答えると誤り。正解は conventional activated sludge process です。conventional は、英和辞典には「型にはまった、在来型の」となっています。活性汚泥法の変法として、ステップエアレーション法、コンタクトスタビリゼーション法、長時間エアレーション法などが開発されたことから、これらと区別するために conventional を用いたものと考えられます。日本語では「標準」と言ってしまったので、「これ以外の活性汚泥法は標準外の出来損ないか」という苦情が出そうですが、標準には「基準」、「規格」のほかに「一番普通のありかた」という意味もあるので、名訳の一つかもしれません。ちなみに、activated sludge process は、促進汚泥法から活性スラッジ法を経て現在の活性汚泥法として定着しています。

それでは第2問、回分式活性汚泥法の「回分」という言葉は広辞苑に載っていない、○か×か? 広辞苑で「かいぶん」を引くと、灰分、快聞、怪聞、回文しかなく、○が正解。ある事務系の偉い方から回分とは何のことかと尋ねられて、「英語ではバッチです」、「それなら分かるのに何で回分なんて難しい用語を使うのか」と苦情を頂戴した記憶があります。たしかに、化学工学用語辞典などを見ないと回分という用語は出ていません。sequencing batch reactor (直訳すると、連続バッチ式反応器) に反応工学の専門用語を当てたため、門外漢には分かりにくい名称となってしまいました。

海外で開発された新技術を導入する際に、それをどう呼ぶかは初期の段階では開発担当者に委ねられており、命名者の造語センスが試されることとなります。同じ新技

術に様々な日本語呼称が存在し得るのですが、一般的には「下水道施設計画・設計指針と解説」に掲載される時どれが採用されるかで勝負がつくことになります。ところで、それを誰が命名したかは、ほとんど知られていません。分かりやすく適確な日本語名称を増やすため、名付け親を顕彰するしくみが必要ではないでしょうか。

< 大嶋 篤 >

※No. 19号(2003/8/19)に掲載